

「ブラウザの歴史とオープンソース」で講演会 改良に欠かせないユーザーの意見・アイデア

近年、急速に普及している「Firefox」の作成に携わってきた瀧田佐登子さん（Mozilla Japan 代表理事）を講師に、「ブラウザの歴史とオープンソース」と題する講演会が10月28日、後

楽園キャンパスの理工学部校舎3号館で開かれた。100人規模の教室はほぼ満席で、多摩キャンパスからわざわざ聴講にきたという学生もいるなど、受講者は最後まで熱心に聞き入った。



講演する瀧田佐登子さん

「Firefox」とは、膨大な情報網となつてい

ネット上の中から、欲しいデータを持つてくる役割を果たすブラウザの一種。「Firefox」という名前は知らなくても、きつねのマークなら見たことがある人も多いだろう。

パソコンのインターネット環境が普及、進化していく中で、ブラウザはどのように変化してきたのか。瀧田さんは、ブラウザの歴史とこれからについて、時折質問を受け付けながら、平易な言葉でゆっくりと話しを進めた。

「大学では化学専攻だったんです」という瀧田さん。卒論のテーマは「酵母菌」についてで、実際にコ

ンピューターに触れたのは就職してからだという。はじめ大手電機メーカーに就職し、比較的早い段階でネットに触れるようになった瀧田さんは、その後、はじめてブラウザを売り物として扱ったNetscape社に誘われて転職、ブラウザ「Netscape navigator 3.0」の立ち上げに携わることになった。

瀧田さんは、ネットに触れてからずっと、日本語特有の「文字化け」にフラストレーションがたまっていたという。せっかくなので「Netscape navigator」の立ち上げに携わるのだから、この「文字化け」を直すことができないか、という思いをつのらせた。

そのうちに、日本語を担当していたのが日本人ではなく、アジア系の人だということがわかった。これでは「文字化け」を根本から直すことはとてもできない、

と考えた瀧田さんは、「文字化け」という概念をまず、担当者に教えることから始めた。

英語では「文字化け」という現象はありえない。英語が苦手な瀧田さんだったが、懸命に「文字化け」という言葉そのものを担当者に植え込んだ。その結果、「文字化け」という概念は浸透し、「Netscape navigator 3.0」の会議でも「Mojibake（モジバケ）」という言葉が普通に使われるようになっていった、という。

その後、Netscape社がライバル社であるInternet Explorerとのブラウザ戦争に負け、会社の財産であるソースコードを一般に公開（オープンソース）した。これにより、ブラウザを使っているユーザーからさまざまなアドバイスが得られるようになり、ブラウザをより良いものへと改良

観客席を満員にするには、どうしたらいいか！ 福澤選手らをパネリストにスポーツシンポ開く

していったのが「Firefox」である。瀧田さんは、その「Firefox」の改良に携わり、いま現在もより良くするために関わり続けている。

最後に、瀧田さんは、今後のブラウザの発展について、「オープンソースになっ

て、非常に便利で使いやすい「Firefox」というものが出来上がりました。まだまだ発展途中で、さらに使いやすく、より良いものにするには、ユーザーの意見が必要です。皆さんのちょっとしたアイデア、こ

れが世界を変えていく足がかりになる、と私は考えています」と述べ、講演を締めくくった。
 (学生記者 橋本奈緒美 11
 大学院理工学研究科博士1
 年)

「中大人のためのスポーツイベントを開催しよう」のテーマで「第2回中央大 学スポーツシンポジウム」(主催：FLPスポーツ・健康科学プログラム、企画・運営：河田ゼミB)が10月14日、9号館クレセントホールで開かれた。

今回は、昨年の「なぜ中 大生は応援に行かないのか？」というテーマから発展させて、「応援に行つて もらおう!」というのが主

題。河田ゼミ生で、女子ラ クロス部次期主将の柏葉麻 実さんが、中大スポーツを 身近にするには何が必要か、 ということについて基調報 告し、TBSテレビスポー ツ局プロデューサーの岩間 幹幸さん、社会人アメフト アサヒ飲料 CHALLENGERS の有馬隼人さん(関西学院 大学アメフト部OB)、北 京五輪代表でバレーボール 部主将の福澤達哉さん(法 学部4年)をパネリストに、

読売テレビアナウンサーの 清水健さん(本学アメフト 部OB)の司会で意見交換 した。

このなかで、有馬さん は、関西学院大学のアメフ ト部が試合で2万5千人も の観客を集めることに関し て、「関西学院生はアメフ ト部を広く認知しているか ら、観客が多いんだと思っ ます。観客は選手と一体と なって応援してくれるので、 戦う気持ちに火がつくんで

す。選手と観客の間に、正 のスパイラルが生まれるん ですよ」と、観客と選手と の一体感の大切さを指摘し た。

と提案した。
 福澤さんは、北京五輪を 振り返りながら、「テレビ で北京五輪のバレーは、盛 り上がっているように見え

また、有馬さ んは、大学ス ポーツを盛り上 げるためにはど うしたらいい か?という問い に対して、「大 学スポーツはア マチュアだか ら、お金ではな く、意地の張り 合いによってス トーリーが生ま れる。観客はそ れに価値を見出 すから応援に来 てくれると思っ ます。中央大学 においては、部 の存在感をだし て、認知度をあ げていくことが 大切だと思う」



福澤さん(左から2人目)ら4人のパネリスト

たかもしれないけど、ホームではないから、中国戦以外はたんとんと試合が進んでいきました。だから、自分たちでモチベーションをあげていかないとだめでした。やはり、期待してみてくれる人が多いほど、プレーにも力が入ります」と強調。

応援にきてもらうために具体的にどうしたらいいか？ということに関しては、「観客は1回試合を見て、楽しいと思わないと、会場に足を運ばないと思う」と指摘したうえで、「中央大学で福澤対清水（北京五輪に出場した東海大学の清水邦弘選手）のエキジビションをやったら面白いのではないか」と具体的に提案、「宣伝活動には部の後輩をどんどん使って下さい」と述べ、会場を笑わせた。

また福澤さんは、「なにより、それぞれの部が良い成績を残すことが大切だと

思います」と観客を呼ぶには強くなるのが大前提であることを強調した。

岩間さんは、大学スポーツをテレビで広めることはできないか？という問いに對して、「テレビには、選手をリスパクトして取材することと、視聴率、商売の二面性がある。大学スポーツでは視聴率はとれないと思う。しかし、大学生がスポーツにかけてる思いはとても強いし、コンテンツも強いから、大学スポーツの可能性も考えなくてはならないと思ってる」と話した。

また、大学スポーツの商業化に関しては、「今のままではちよつと無理。チームの顔が抜けたりますとすぐに視聴率は下がってしまうし、そもそも大学スポーツは商業になる必要はない」と指摘。観客の動員については、「チケットの売り方など、ちよつとしたブ

ロの視点をいれてみることで、大学というコミュニケーションに宣伝し、集客を狙ってほしいと思う」と提案した。

質疑応答に移ったあと、

中大グラウンドで日大とラグビー公式戦

選手と観客が一体に。惜しくも逆転負け

本学OBでプロバスケトボールで活躍する五十嵐圭さんからの、「友達が見に来てくれたから頑張れた」というメッセージが紹介され、最後に福澤さんが、「優

勝できるように頑張りますので、応援に来てください」と述べ、幕を閉じた。（学生記者橋本あずさ 法学部1年）

青々と輝く人工芝、雲ひとつない快晴。秋の最高のスポーツ日和だ。11月2日、中央大学グラウンドで関東大学リーグ戦中央大学VS日本大学のラグビーの試合が行われた。

この日は、白門祭の開催期間中ということもあり、ラグビー部のOBをはじめ、ベビーカーに子供を乗せて観戦に訪れる地域の人たちや高校生ら大勢のラグビーマニアが観戦に訪れた。試合開始時間30分前だというのに観客席は、すべて埋ま

り、座りきれない人たちは、グラウンドの端へ行ったり、シートを広げて観戦するグループもいた。

選手たちは、試合前からとてもウォーミングアップとは思えない勢いでグラウンド内を動き回り、気合を入れる。試合前から選手たちの熱気が伝わってくる。試合前の練習を終えると、選手たちは、一度グラウンドから引き上げ、試合に備える。そこで選手たちは、気合の校歌を歌う。その歌声は、グラウンド内にも伝わり、観客も共に歌う。中大がひとつになった瞬間だ。

そして、選手たちがグラウンドに入場し、試合開始。試合がはじまると同時に、観客席も興奮の渦と化する。秩父宮ラグビー場のような大きい競技場と違い、中央大学グラウンドでは、自分の目の前で、タックルやトライを観ることができ。また、観客の声援もよく通り「繋ぎ繋ぎ」、「押せ押せ」など声も飛び交い、選手と観客が一体となった。ハーフタイム中には、グ



観戦に訪れた中大ラグビーファン

ランドの中を駆け回る子供の姿もあり、大きい競技場とは一味違った雰囲気であった。
 試合は残念ながら、17―24で中大は逆転負けしてし

まった。試合終了後、その悔しさから「中大が負けて悔しい」と言いながら涙を流す子供の姿もあった。
 (学生記者 上田雄太 文学部3年)

「アジアにおける新たなロースクールの将来―グローバル化に対応した法曹養成―」をテーマにしたシンポジウムが11月29日、市ヶ谷キャンパスの法科大学院で開かれた。シンポジウムには、来年3月に法専門大学院（ロースクール）の開院を控えた韓国から本学と協定関係にある10大学の教授を招き、中央大学、琉球大学のロースクール教授、それに実務家を交えて、パネル・ディスカッションを行い、グローバルな法曹の養成について活発な意見交換を行った。



韓国10大学の教授を囲んで記念写真

開会にあたって中央大学の福原紀彦・法科大学院法務研究科長が挨拶したの続き、永井和之総長・学長が、イギリス法律学校として本学が創設されたことを指摘したうえで、「世界的に本学を存在感のある大学にしたい」と強調。そのために6月にソウルで開いた国際シンポジウムを第一歩として、「点が線に、さらに面につながることを望んでいます」と述べて、シンポジウムの成果に期待した。また久野修 慈理事長は、「韓国と日本両国の交流のなかで、すばらしい法曹が養成されることは、東アジアの相互発展につながる」などと述べ、そのために最

「グローバル化に対応した法曹養成」をテーマに 韓国10大学の教授を招請してシンポジウム開く

大隈支援していくことを約束した。

前法相の保岡興治・衆院議員の挨拶（秘書代読）のあと、前最高裁判所判事の才口千晴・弁護士が挨拶に立ち、「あるべき法曹像」とは、ものの道理がわかり、国民目線の間感と喜怒哀楽が通じ合う心の優しさ、共感しあえる心を持ち、問題解決の知恵があり、分別の



活発な意見交換が行われたパネル・ディスカッション

とは、日本のロースクールの取り組みについて中央大学法科大学院の伊藤壽英教授と琉球大学法科大学院の永田均教授が報告した。

このなかで永田教授は、琉球大学が沖繩の持つ歴史的国際性を有した法曹を養成する目的で、2004年度以

判断ができることなど指摘。そして「法曹の使命は、究極の価値である正義です」と述べて、シンポジウムの成功を祈念した。

シンポジウムでは、グローバル化に対応した法曹養成に関する構想について、まず韓国の高麗大学、漢陽大学、成均館大学、延世大学の各教授が個別にそれぞれ報告。休憩をはさんだあ

来、毎年度、ハワイ大学ロースクールで研修プログラムを行っていることを挙げ、「参加した学生たちに大きな刺激を与え、学習意欲を促進してきた」などと述べ、成果をあげていることを紹介した。

明治大学法科大学院の報告が文書で紹介されたのに続いて、実務界からユアサハラ法律特許事務所の矢部耕三弁護士が、国際化する法曹に必要な要素として、①外国語能力②自分の価値を押し付けないこと③法律以外の実務を知ること

の3点を指摘。そのため「外国語を勉強できる環境」や「外国法制や比較法的体験」を提供することが必要であるとした。

次に三井物産法務部の加藤格部長が、「企業からみれば、大事なものは『有能な社会人』であり、『バランス感覚を有するビジネスマ

ン』になりうるかがポイント」と指摘。「司法試験合格はあくまでも『資格』で、有資格者と企業における有能な人材とは別である」と述べ、実務界の立場からの見解を示した。

付け加えて加藤部長はグローバル化への対応について、①西洋化でも英語化でもなく、自分の確固としたアイデンティティを持つ②異文化を尊重する③普遍的な価値を持つて人を引き付けることが重要と強調した。

続いて中央大学法科大学院の柏木昇教授を進行役に、パネル・ディスカッションに移った。はじめに韓国の建国大学、梨花女子大学、仁荷大学、ソウル国立大学、韓国中央大学、慶熙大学、延世大学の各教授が、それぞれの現状と取り組みについて新たに報告。

これを受けて柏木教授が、日本のロースクールの現状

について「大変心配される事態が起きている」と述べ、新司法試験の平均合格率が当初見込まれた7〜8割に及ばず、3割程度にとどまっております、一人の合格者も出せなかったり、数名しか出せなかったロースクールは「存亡の危機にある」と現状を説明した。

また合格者を増やす対策として、相当数のロースクールは公法系、民事系、刑事系の法律基本科目の授業を増やしたり、答案作成練習をやらせたりするなど、「受験教育に傾いてきている」と報告。学生も教員も

司法試験合格に躍起になるため、「国際化など司法試験に直接関係のない科目が犠牲になる」と問題点を指摘した。

質疑応答では、主に次のような意見が交わされた。「国際化においては何か英語。だが韓国語がきちんと話せないと駄目。韓国

法を知ってこそアメリカ法も紹介できる。アジアにおいては韓国、日本、中国が協力して法律共同体のようなものをつくりたい」

「グローバル化をアメリカやヨーロッパに押し付けられる。それは本当にまともな現象なのか。アジアの学生が英語圏の学生と対等な力を持つことがどういうことか、それを考えるべき。新しい方向性を導くときに来たと思われる」

「アメリカが全てとは言

水俣病の患者さんら向け特別授業

52年経っても認定申請は現在進行形

12月1日、法学部の総合講座「MINAMATA」で、熊本県水俣市から東京に来ている水俣病の患者さんらを迎え、「水俣病を伝えるプログラム」と題する授業が行われた。この講座は、

30年以上水俣病に関わってきた実川悠太講師と、奥山修平教授（科学）、細谷孝教授（倫理学）が行っている。この日は、水俣市にある共同作業所の社会福祉法人

さかえの杜「ほっとはうす」の施設長、加藤タケ子さん、胎児性水俣病の患者さんら6人が、受講生を前に語った。
 水俣市の新日本窒素肥料（現チッソ）のメチル水銀

われないが、コモン・ローの理解なしにグローバル化はない。人口としてコモン・ローに手をつけるが第一歩。英語とコモン・ローの知識がないと、交渉もできないし、契約書も書けない」

「アメリカのロースクールも変わってきている。外国の情報を集め、学生たちにそれを教えたがっている。英語を使って、他の国の価値観などをもつと我々のサイドから発信できないかな、と思っている」

「英語能力を育てなくては仕事にならない。英語があるからだ。英語ができると経費がかからない」

最後に、中央大学法科大学院の大村雅彦教授が、「日本と韓国が将来、アジアのなかで中心的な存在になって協力関係を構築していかなくてはならない、と強く感じました」と閉会の挨拶をして、5時間にわたったシンポジウムを締めくくった。（編集室）



水俣病の患者さんと特別授業

「生まれた当時は首がすわらず、小学校1年生になつたときにようやく歩けるようになった。（三輪車に乗っている写真を見せながら）三輪車は歩けなかったの、移動手段として乗っていた。今も天気の良いときは、片

を含んだ工場廃水が海へ流れたことで、メチル水銀が魚介類に蓄積され、その魚介類を食べた人々が被害にあった。水俣病には、手足の感覚障害、視野狭窄など様々な症状があり、なかには言語障害を持つ人もいる。多摩の生まれで、20年ほど前に水俣市に移り住んだという加藤さんは、「東京の大学生を前にして水俣病のことを伝えられるのは夢

のような話」と切り出した。そして「52年前に水俣病が公式確認されて、52年経つた今でも、水俣病の申請をする人がいます。現在進行形の話なのです」と説明した。
 加藤さんのあと、6人がそれぞれに自分の伝えたいことを、加藤さんの助けを得ながら、自分の言葉で語った。
 「生まれた当時は首がすわらず、小

道5キロほどの道のりをマウンテンバイクで『ほっとはうす』まで通います」

「元氣なうちに東京へ来てよかったです。大学というところに初めて来たので、来れてよかったです」

「(ずっと通いたかった)

学校に、病院のなかに学校ができたことで、12歳のときによく通えるようになりました」

最後に加藤さんが、「言葉では感じきれない仕事や顔をみて欲しかった。書物で学ぶことのできない水俣

病を感じて欲しい。水俣病の患者さんと関わったからこそ感じられるものがあります。『ほっとはうす』にぜひ来ててください」と締めくくった。

(学生記者 武田朋美 11 学部3年)

大麻等薬物に関する防止啓発講演会開く

身体、精神を病み、待つのは「受刑」

「いわゆる非合法ドラッグ」をテーマに、大麻等薬物に関する防止啓発講演会が12月5日、千葉大学社会精神保健教育研究センターの羽間京子教授を講師に招き、多摩キャンパス8号館で開かれた。

冒頭、永井和之総長・学長が挨拶し、「大麻が世間で問題になっているなか、ドラッグとは何物なのか、健康にどう害があるのか、正確に認識する必要がある

ある」などと述べ、大麻など薬物を防止するには、薬物の問題点をきちんと知って置くことが重要であると強調した。

羽間教授は講演のはじめに、「ドラッグは精神に大きな影響を与えるものです」と、ドラッグの怖さを指摘。そのうえで違法薬物の種類やその作用、「依存性」が高まるサイクル、薬物乱用の状況などについて、薬物乱用者の証言を交えな

がら、具体的に解説した。

このなかで大麻について、「ゲートウェイドラッグで、害がない、と言われるが、とても危ない薬物です」と、大麻が中枢神経興奮剤、同抑制剤、幻覚剤に分類される乱用薬物の作用を合わせ持った恐い薬物であることを紹介。

また、薬物の作用で、「痛くて、苦しく、骨がちぎれそうな思いになる」身体的依存や、「(薬物が)

きれると欲しくて欲しくてしようがなくなる」精神的依存が生まれる。覚せい剤の場合は、摂取後、すぐに覚醒、興奮、多幸感が出て、3〜5時間持続するが、きれると一気にレベルが下がり、今度は「渴望」感が出て、薬物が欲しくなる。それが繰り返されると、「初めは少量で効いていたものが、大量の薬物がないと効果が得られなくなり、『依存』が形成される」と述べた。

をみると、近年、大麻の摂取量は減っているものの、検査者は増える傾向にある。この状況について羽間教授は、「大麻が闇に潜っているということですよ」と指摘。検査者中、大学生が占める割合が高い薬物は大麻で、しかも、その率は平成19年の2・4%から、20年上半期には9・4%に上昇している、という。

大麻は、精神的依存が強い薬物で、「無気力(無動機症候群)」になる一方で、「攻撃性を高める」症状が現れるという。羽間教授は、「大麻はハッピーになる方向だけでなく、他者に対しても非常に攻撃的になる」と力説。他方、真っ黒なタールが大量に出るため、肺や気管支への負担が大きいなど、「身体にも悪い」と強調した。

違法薬物の摂取量の推移

(編集室)